



四十年前の芝居と人形

同人 森 ぼ の ぼ

號數四百を重ねた本誌の創刊は明治三十二年三月、當時の劇壇を振り返ってみると、まだ團菊左華やかなりし頃で、菊五郎が櫻痴の「蘇原」を出せば、左團次も其水の「山田長政」などといふ新しいものを見る、極めて活氣のあつた時代である。中にも團十郎はその前年の二月、三月と大阪歌舞伎座へ出勤してゐる。これは初お目見得で、給金五萬圓といふ事が問題になつた。

現在の本誌愛讀家で當時まだ出生されてない方が大分あらうと思はれるが、今の若手の中でも我當、芝鶴、小大夫、田之助などはまだくゝ生れてなかつた。思へば、本誌も國寶的存在である。

このあひだも酒井米子に出會ふと、森さんもすゐぶん古い蒸さんですねといふんです。言はれてみると成程さうで、米子の初舞臺だつたと思ふ「ヂオゲネスの誘惑」——樽仙人——の少女も見てゐるし、猿之助とやつた「野鴨」の娘も見ているので、あの時分十五六の愛くるしい娘だつたあなたも良いお母アさんになつたねて笑つたんですが、そういう自分もいつ

の間にか白の髪が似合ひさうになつてます。何しろ一番古い記憶にあるのが、明治二十三年五月の新富座といふのですからね。この年の春、上野に博覽會の開かれたのに懸けて、しかも場所も時も丁度出合つてるところからこの時の一番目は「上野の戦争」でした。有名な天野八郎の金魚屋の立廻——八郎は五代目(菊五郎)で、道具も例のごとく凝つたものだつたんださうですが、それはまるでおぼえてゐません。子供だけに山内の戦争の幕は印象が深かつたのでせう。少しばかり記憶に残つてゐます。眞赤なバレンの附いた金塗りの纏のやうな差し物を擔いで、花道を飛んで出た威勢のいい薙のものの(新門の子分會津の長吉)を左團次(先代)だとばかり思ひ込んでましたが、脚本で見ると、それはあの松助で、長吉に首を打たせる彰義隊の侍(酒井幸輔)が左團次なのです。長吉がうまく首が切れぬところで見物が笑つてゐたのを不思議に覺えて

ゐます。

それから中幕が「勸進帳」で、近來は見る方が麻痺してしまつたが、これこそ本當の豪華版で、團十郎の辨慶、左團次の富樫、菊五郎の義經です。こんな代表的な「勸進帳」も子供には有難くなかつたと見えて、運動場といつた今の休憩所に當る其處の賣店で買つて貰つた玩具は覺えてゐるが、肝心の舞臺の方は更に印象が無いんです。パノラマ、といつても今の方には分らないでせうが、その時の博覽會に始めてパノラマなるものが出来たので、油繪の背景や切出しの人物で、その時は上野の戦争の實況を見せたのです。私の買つて貰つた玩具といふのがそのパノラマに型どつたもので、上の捻子を廻すと、上野の戦争や勸進帳の舞臺面が出るのでした。買つて貰つて間も無く富樫の豆人形が所作舞臺からポロリと離れてしまつたのを今だに覺えてゐます。無論、芝居も好きだつたのでせう、かういふやうに五つ頃の芝居を少しでも覺えてゐるのですから。尤も芝居好きはお家藝の方かも知れませんが、父もかなり好きでしたし、母も嫌ひではなかつたやうですし、祖父(有馬屋清右衛門)は例の天才兒の田之助の爲に金主にまでなつたのですから。

祖父が上方から連れて歸つたやうに聞いてゐる、もと高砂屋(福助—先代梅玉)の義弟で、澤村門下へ這入つて千鳥といつた女形がありました。後に尾上家へ移つて美雀と改めて、旅などでは五代目女房役をやる位の腕のある役者でした。

祖父が死んでからは、從來の關係で父がいろいろ面倒をみてたのでした。この優の家へ私は小さい時よく遊びに行きました。樂屋入りも一語にしたやうでしたし、同じ芝居を何度も見たやうに思ひます。芝居に倦きればその部屋で遊んでゐました。かういふ始末で、三度の飯より芝居が好きになつたのも、これは寧ろ當然でせう。それにかて加へて、父の弟が二枚目どこの女役者を女房にして大道具の仲間に入つてゐました。これが爲に芝居への出入りは全く自由でしたが、その割にさう出入りしなかつたのは今思へば不思議です。こんなわけで、髷、衣裳、大道具、小道具、つまり「裏」の事は自然覺えるともなく覺えてしまひました。人形芝居(人形淨瑠璃)を見始めたのも、やはりこの時分でした。

その頃、私の家の近所に色物の寄席がありました。そこへは播磨、大隅、朝大夫松太郎、後には綾之助などの素淨瑠璃もかゝつたやうですし、天一の手品、源水の獨樂、南京の劍打ち、月世界旅行などの藝當も見ましたが、一番私を引きつけたのは、吉田國五郎と竹本組之助の人形芝居でした。(私は人形淨瑠璃と言はず、人形芝居と呼んでゐました。淨瑠璃より人形の方が主だつたからでせう)國五郎はもうかなりの老人で、看板にも大人形の肩書きがあつたやうで、それを賣り物にしてゐたのでせう。組之助は中年で固太りした女でした。おそろしく白粉を塗つてる時もありましたが、どつちかといふと男性的な顔で、腹から出るしつかりとした懸け髷

をかける時には、一層顔の肉が緊き縮まりました。早替りや三味線の胴抜けなどのケレンを得意にしてゐたやうでした。この二人から見せられた物は、多くは鬨り殺しや折檻の變態的興味の狂言や、幽霊妖怪の陰惨な物で、「五右衛門の釜うで」(五郎市折檻から釜入り)、「中將姫の雪責め」「累」(身賣りから土橋の殺し)、「佐倉宗五郎」(皿屋敷)、「九尾の狐」(眞面目なところでは「二十四孝」の奥庭などが今も頭に残つてゐます。宗五郎親子の亡霊が、はりつけ姿のまゝ堀田の屋敷の襖越しに現はれるところなど人形でも芝居でも、もう上演されることはありますまい。併しその頃の芝居ではそんな事は普通で、缺血の折檻だの、時鳥殺しなど、小芝居では殊更出し物としたやうに思ひます。揮一つの丸裸ではりつけにされる鳥居常右衛門や、お祭佐七だつたか殺した女の切首が土手をころげ落ちる場面など今の方達には想像も及びますまい。これと同時に卑猥な物も芝居には一狂言に一個所や二個處はありましたが、人形の方には餘り多くなかつたやうです。これは何にしても相手が人形だつたからのことでせう。併し幼い自分が人形を見て一番心持よく面白く思つたのは、白い長い毛の兜を持つて狂ふ美しい八重垣姫と、その兜にのりうつる白狐の眞に迫つた肢體動作、それからもう一つは御祝儀の舌出し三番です。あの素袍の兩袖を窮屈さうに兩肩へ上げて首を振り振り拍子を踏む面白さは何度見ても全く見倦きる

ことはありませんでした。(今も文樂では開幕に先立つてこの三番を踏む慣例を守つてゐるのでせうか？その頃は芝居でもまだ三番を踏ませてゐたやうに思ひます)幕明きの前の三番が話のキリに廻りましたが、あくびの舌が出ぬ中に、こゝらで留めの柝を打つことにいたしました。

追加——國菊左の「勸進帳」が出た時の二番目が鷹治郎初お目見得の(盛綱陣屋)であつたことを一寸中添へておきます。その時の小四郎が杏花左國次(當時ぼたん)でありました。

土佐會の談合

會主竹本土佐大夫逝去したるも生前大序會を始め斯道のために盡瘁せし功勞を思ひ會長池田一曙、會計岡本井筒、佐々田一昇、西田万花、總務伊東柳平の諸氏、聖天下南郎に會し土佐師の功績は其の一半を夫人の功に歸するものありとて將來時折會員打寄り靈を祭り、たま子未亡人を慰むる事を申合せたりと云ふ。友情掬すべき哉。